
死神閣下は円舞曲《ワルツ》を踊る

水月レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神閣下は円舞曲を踊る（フルッ）

【Zコード】

N3627D

【作者名】

水月レイ

【あらすじ】

東に森の古城には低体温低血圧、その上特異体質な死神閣下が眠っていました。百年の眠りから覚め、食事を求め夜な夜な彷徨う閣下と風変わりな使用人+の物語。

第一夜 死神閣下と執事様

東の地には、鬱蒼と繁る木々に半ば覆われた大きな古城がありました。

そこには百年周期で眠りを繰り返すとても低体温低血圧な死神閣下がいらっしゃいました。

今日は死神閣下が眠りについてから百と一年目、ちょうど眠りから覚める日でした。

「…寒い」

いい加減起きて食事にしなければ、いくら死神閣下と名高い自分でも命に関わりかねない。早急に食事を採らねば。

栄養不足でただでさえ低い自分の体温が死体のそれと変わらないほど冷たくなつてきていた。

お腹がとても空いた死神閣下は田覚めて半日経つてからようやくベットから起き上りました。

お腹が空いたり栄養補給のために食事をとるのは当たり前です。ただ死神閣下の食事は普通とは違うのでした。

「お恥ずかしい限りですわアレス様」

「いいえそんなことはありません」

気恥ずかしげに俯くまだあどけなさが残る少女に黒紫の髪の美丈夫が優しく微笑みかけた。

「とてもダンスが初めてとは思えません。まるで自由に舞う可憐な蝶のようだ」

「まあお上手」

美しい男の魅力的な笑顔と言葉に少女の白くすべらかな頬が薔薇色に染まつた。

「素敵ですわ」

遠くから男を一心に見つめていた娘たちの間から切なげな溜め息がもれた。

ダンスを踊っていた者たちも動きを止め中央で踊る一人を、否、美しく妖しいまでの美貌を誇る男の踊るワルツに我を忘れるほどに見入つっていた。

夜会に集まる美しい貴婦人や妙齢の貴婦人、果ては男までも妖しく美しい黒紫の髪の男に心奪われ陶然とした。

男が極上のルビーのような真紅の瞳を伏せがちにするぞっとするような色気が醸し出された。

真紅の瞳を覗き込んでしまった少女は恍惚とした表情を浮かべた。まるで血に酔つてしまつた時のように。

少女の熱に浮かされたような潤む瞳を見て男はすっと目を細めた。美味しそうだ。

心が浮き立つを感じ男は極上の笑みを浮かべる。ワルツを踊り終えると、男は人が集まつてこない内に少女を伴つてその場を後にし、人気の少ない庭園へと誘つた。

月光が優しく降り注ぐなか二人はお互いを見つめ合つた。男が首筋にそつと手を触ると少女は瞳をゆっくりと閉じていつた。

いただきます。死神閣下は心のなかで合掌すると思つて存分食事を楽しんだ。

死神閣下は美食家だつた。人間の生氣を糧とする彼は好みにうるさいところがあつた。

人間にはオー・ラつまり魂の色みたいなものがあった。

例えば黒い色のオー・ラは、苦くて臭くて舌が痺れるような想像を絶する不味さだ。

美味しいのは、本日堪能したピンクのオー・ラやオレンジのオー・ラだ。

疲れた時には、赤色のオー・ラが良く効く。

だが、一度食べたオー・ラは鮮度が落ちるのか、二度目三度目はあまり美味しいらない。

その為同じ人物のオー・ラを食べることはまずない。今日食した、あどけなさの残るピンク色のオー・ラはなかなか美味であったが二度目は無理だろう。

明日もまた死神閣下は新たな美味しいオー・ラを求めて円舞曲を踊ワルツる。

東の地の鬱蒼と繁る森の木々に半ば埋もれた古城には、百年の眠りから覚めた低体温低血圧な死神閣下と男嫌いの執事様が住んでいました。

田課である食事を早くも終えてしまった死神閣下はあてもなくフラリと町を歩いていた。

若い娘の黄色いオー・ラは可もなく不可もなくという感じだった。

人間の生氣を糧とする死神閣下は、人の魂の色、オーラを視認することが出来た。

そんな死神閣下は美食家であったが、長い眠りから覚めてからと
いうもの、閣下の眼鏡に叶う生氣の持ち主は一人もいなかつた。

「どこかに美味しそうなオーラの持ち主はいないだろうか」

まだ見ぬ極上のオーラを持つ者を求め今日も今日とて町をさ迷い
歩く死神閣下。

そんな死神閣下の目の前を美しい青年が横切りました。

「なんて美味しそうな水色のオーラなんだ！」

死神閣下が白皙の美貌に蕩けそうな笑みを浮かべると道行く人々
は皆、美しく色氣のある男に見入つた。死神閣下の目を奪つた青
年を除いて。

「君」

死神閣下が声をかけると銀色の長髪を翻し青色の切れ長の瞳の青
年が振り返つた。

陶器のような白磁の肌に中性的な容貌の美しい青年は険のある視
線を歩み寄つてきた美丈夫に向けた。

「私は今、非常に機嫌が悪い。その上、私は男が…特に、顔の良
い男と醜い男が大嫌いです。ハツ当たりなどしたくありませんので
さつさと失せてください」

既に青年の言葉はハツ当たり気味だったが、死神閣下は気にせず
あっさりと謝罪をした。

「それは失礼をした。すまない」

死神閣下は自分が充分に美しい事を自覚していた。稀代の彫刻
家が精魂込めて作つた容貌は女性的な訳ではなく彫りが深く整つた
顔立ちは男性としての魅力と色気に溢れていた。

「君の水色の生氣オーラがあまりにも美味しそうだつたゆえ」

「何を訳の分からぬことを。大体なんです水色とは。赤や青な
らともかく」

魅惑の低音に聞き惚れる事無く青年は不快げに眉を潜めた。

生氣と言われて想像するのは、普通なら燃えるような赤や瑞々しく清らかな青だろう。

穏やかに微笑んでいた美しすぎる男は、不機嫌な青年の言葉に真紅の目を見開いた。ガシッと青年の肩を抑え熱弁を奮つ。

「何を言つ！清涼な気配に満ちた穢れなきオーラではないか！澄んだまるで余人が踏み入ることのない秘境の湖のようではないか！これほど生命力溢れた美しく見事な生氣は何千年と生きているが初めてだ！！」

男は白く冷たい美貌を覗き込むようにしてうつとりと語る。接触による不快感を感じることなく青年は怒りを突き抜けて呆れた。

「分かつた。讃め言葉として受け取ろう。　いい加減手を退けてくれ」軽い脱力感を覚え青年の言葉遣いが多少乱雑になつた。手套越しに伝わる男の熱が酷く冷たく少し心がざわめいた。

「掛け値なしに讃め言葉なんだが。　すまない冷たかったか。特異体質なせいか、低体温低血圧でな。食事をすれば、少しば暖まるんだが…」

先程のオーラは食事とも言えない粗末な物だつた。夜までの繋ぎに過ぎない。

「そうかではさつたと食事にすればいい。私は用があるのでこれで」そつてなく答えると青年は、腰まである見事な銀糸を翻し躊躇いのない足取りで立ち去つた。

「さよなら水色の君」

聞く者を陶酔させずには居られない低い美声を残し死神閣下も雑踏の中へと踊り出した。

「どうなさいましたのブラッダレイ様」

物思いに耽つていた死神閣下は不安げな顔のレディに蕩けるような笑みを向けた。

「何でもないのです。ただ貴女があまりにも可憐なので暫し時を忘れてしまいました」

ターンのために背中に手を添えられた子女は頬を染め俯いた。

「まあ、ブラッドライ様たらお上手ですね」

「俯いては行けませんよ。ワルツは優雅に気高く踊らなくては。私は感じたことを素直に伝えているだけ。美しい貴婦人を褒めない者など男の風上にもおけませんから」

「ブラッドライ様…」

「この世のものとは思えないほどの美しい男に巧みにリードされ縁のドレスを身に纏つた子女はうつとりと身を委ねた。

彼女だけではなく、ホールで踊つているもの達ですら、男の可憐なステップに見惚れ、一片の歪みもない妖しく輝く血のよびつな極上の瞳に酔いしれた。

幾人もの心を奪つておきながら死神閣下の心は遠い所にあつた。ほんの一時言葉を交わしただけだと言うのに数日前に出会つた水色のオーラの青年が頭から離れなかつた。

ふとした瞬間に光を閉じ込めたような深い青色の冴え冴えとした眼差しが鮮烈に蘇る。

彼にあつて以来ますます人々の生氣^{オーラ}が色褪せ、気が進まないまま食事をすると味気なく物足りなかつた。

死神閣下はこれ迄女性の生氣しか吸つていなかつたが、主義を覆しても彼の水色のオーラを食してみたかつた。

同性であつても握手位なら構わないと。

その程度ではおやつにすらならないが、例え雀の涙ほど微少であつても一度だけでも味わつてみたい。

曲が終わり移り変わると身を離し閣下は子女を近くの男性に委ね壁際まで下がつた。

「ワインは如何でしょう」「喧騒に紛れることのない涼しげな

よく通る声を耳にし、閣下は驚きを露にした。

声の方に視線をやると広間の明かりを纏つた銀糸に自然と感嘆の

息が漏れた。美しいものに性別は関係ない。

「こんな濁つたワインが飲めるか！ ほつよくみるとなかなか整つた顔立ちではないか。詫びに今宵付き合つがよい」

顔を大きくしかめていた中年の男は給仕の顔を目にした途端、臆面もなく喜色を浮かべた。

中年の男が銀色の長髪へと手を伸ばすと、青年は、素早く身を引き嘲笑した。

「どうやら赤ワインは高級すぎてお口に合わないようですね。失礼致しました。アルコールがそれほど強くないロゼワインを御出しするべきでした」

「なつ」

給仕の暴言と冷ややかな見下す視線に上品とは到底言えない男の赤ら顔が歪み気色ばんだ。

「それと夜伽を申し付ける前に一度」自身の御尊顔を確認なさると要らぬ恥を搔かずにお済みになるかと。少なくとも私には自虐趣味は「ござ」ませんので貴公のお相手は致しかねます

「まあ」

「クスクス、嫌だわ」

「見苦しいことこの上ないですな」

歯を剥き出し怒りに真つ赤になつた男に周囲から失笑がとんだ。

貴族とは思えない醜態をさらす男とは対照的に給仕の青年は、静かでそれでいて冷ややかであるのに何処か優雅さを感じさせる物腰だつた。着ているものは普通の給仕服であるのに彼が着こなすと一級品にも劣らなかつた。

「くつ首だ！ よくも儂に恥を搔かせおつて。お前など首だ。お前のような卑しく品性に欠けるものを雇つなど夜会の主催主の品位を疑うわ！！」

「己の立場を弁えぬ男の暴言に周囲の人間の怒りに火がつく。

「んまつ」

「極上のワインを一つくれないか」

貴婦人が金切り声をあげようとした瞬間、響いた豊かな美声に広間は静まり返った。

「香り高くほんのり温め度だ。貴方もどうです。赤ワインは肉料理にとても合つ」 給仕から受け取つたワインに軽く口づけ光に透

「どうやら御氣分が優れない様子。今宵は休までは如何か」
男が苦笑すると周囲から切な気なため息が漏れた。 深紅の双眸
に見入られたかのようなぎこちない足取りで中年が去ると広間に再
びざわめきが戻った。

ちらちらと死神閣下と給仕の青年に視線が集まるが、美貌の一人を遠巻きにし、近付く者はいなかつた。

「いえ、先日勤め先を首になつたので」

男の美貌にたじろぐ」となく青年が普通に接してくれることが閣下はこの上なく嬉しく、顔が綻ぶのを感じた。

「近藤の連絡手段は、この二種類だけです。」

青年の境遇を死神閣下はしみじみと氣の毒に思つた。此だけの美貌を女性が放つておくわけがない。

身分の高い女性は得てして夢見がちな人が多い。

そんな人は得でして、中性的で品位の感じられる青年を前にして、仕事と好意を混同し、するべき事をしているだけだというのにこの人は私に好意を持っているに違いないと思い込み、自分に都合のいい

いようにしか言葉を受け付けず理解しない。

そんな人ばかりではないが、独りよがりな女性が多いこともまた事実だつた。閣下の声音に心からの劳りを感じとつたのか青年の冷ややかな雰囲気が緩んだ。

「明日からまた職探しです」

食探しと聞こえたのは氣のせいだらうかと首を傾げつつ、閣下は思い切つて青年にお願いした。

「いきなりで、不躾だが貴殿の水色のオーラを味見させて欲しい」

「何なんです一体。意味が分かりません」

「ワタシは人間と違ひ食物を攝取しない。その代わりに入々の生氣つまりオーラを分けてもらうことで生きている。私を死神閣下と呼ぶ者もいる」

「人間ではないと？荒唐無稽と言いたいところですがあなたの存在は人外と言われた方が確かに納得できます。それで私に生氣を提供しようと」

いつぞやのようにだんだんと青年の口調がぞんざいになつていつたが閣下は少しも氣にしていないうだ。

「ああ。駄目だろうか。ただでとは言わない。条件をつけてもらつて構わん」

「そうですね…」

青年は考え込むようにトレーを持つてない方の手を頸に添えるとしげしげと死神閣下を眺めた。

「その身なりからして城の一つや二つお持ちでしよう？衣食住保障で執事として雇つていただけるなら手を打ちましょう」

「城と言つても百年近く放置したままから廃墟と言つても差し支えないほどの有り様だ。使用人もいない故、執事の仕事など何もないぞ。それより庭師にならないか？城が半ば以上木々に埋もれ、このままでは森と同化してしまつ」

「嫌です。手が荒れてしまう」

青年がにべも無く断り、踵を返そとしたので、閣下はこの上な

く焦りあつさりと降伏した。

「分かつた執事で構わない。いや頼む。我が城の執事に」

「ではお引き受けします」

素直な閣下に青年は初めて笑みを見せた。

こうして東の森の古城には特異体質な死神閣下と男嫌いの執事様が暮らすことになりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3627d/>

死神閣下は円舞曲《ワルツ》を踊る

2010年10月14日15時09分発行